

2 おたる 小樽

(北海道小樽市)

注目ポイント！

歴史的建造物・街並みと運河を活かして、国際的な観光地へ。
誰でも参加できる、手づくり型の冬のイベントを通して通年型観光地へ。

市内観光入込客数が約273万人から約756万人に！
(昭和61年度) (平成17年度)



小樽運河と雪あかりの路

コラム

小樽運河保存のため「ポートフェスティバル」「小樽運河百人委員会」に参画して以来、現在も「小樽雪あかりの路」など観光まちづくりとイベントのリーダーとして精力的に活動している。

観光や道路状況など官民の情報を織りませ、ITを活用した広域観光情報発信にも取り組んでいる。



観光カリスマ
株式会社 代表取締役
小川原 格氏

これまでの経緯

- 昭和48年(1973) 石造倉庫群の解体が始まり、「小樽運河を守る会」が発足する。運河論争を契機に、歴史的景観を「まちづくり」へ活かすことが官民共通認識となり、民間の歴史的建造物再利用や、多くの組織による様々な活動と提言がされる。
- 昭和53年(1978) 市内の若者達が運河保存運動の一環として第1回ポートフェスティバルを開催する。
- 昭和58年(1983) 運河保存運動の中心となる小樽運河百人委員会を設立し、全面保存を支持する約10万人の署名を集める。
「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」が制定される。
- 昭和61年(1986) 小樽運河散策路が完成し、小樽市により周辺地区が景観地区に指定される。
- 平成2年(1990) 小樽市観光物産プラザ、小樽マリーナがオープンする。
- 平成4年(1992) 「小樽の歴史と自然を生かしたまちづくり景観条例」が制定される。
- 平成11年(1999) 雪あかり実行委員会が立ちあがり、第1回小樽雪あかりの路が開催される。小樽築港駅周辺にマリロード、複合的商業施設などがオープンする。
- 平成14年(2002) ITを活用した道案内システム(iネット)の実証実験や小樽運河の浄化対策が始まる。
- 平成16年(2004) 小樽 - 舞鶴間に高速フェリーが就航、所要時間が30時間から20時間に短縮される。小樽雪あかりの路が手づくり郷土賞(地域活動部門)を受賞する。
- 平成17年(2005) 第12回優秀観光地づくり賞の金賞(国土交通大臣賞)を小樽市が受賞する。
- 平成18年(2006) 第8回小樽雪あかりの路で、来場者数が50万人を超える。

当該地域は「わたしの旅100選」(平成17年)として選定されたプランに含まれています。

主な取り組み

小樽運河の再生

小樽運河の保存を巡って起きた論争を契機に、小樽市が埋立てを計画していた小樽運河を景観資源とするため、散策路の整備や浄化対策を推進。

また、周辺地域では民間企業も石造倉庫を活かした商業施設とするなど官民協働のまちづくりが進行。

さらに、案内板に多言語を表記するなどの取り組みの結果、外国人観光客も増加。



小樽雪あかりの路



雪あかりの路(スノートンネル)

冬に弱い小樽観光を盛り上げる気運が高まり、市民らで構成される小樽観光誘致促進協議会が実行委員会を立ち上げ、降り積もる雪と明治からの歴史的な街並みのなかでスノーキャンドルを街中に灯すイベントを主催。

回を重ねるごとに、国内外からの観光客の中には、ボランティアへ参加し、スノーキャンドルづくりを楽しむ人も増加。



韓国から参加のボランティア

しりべし/ネットと/センター

ITの普及をきっかけに、官民が協働でポータルサイトを開設し、快適なドライブ旅行のため、地域に密着した情報と公的な情報などをタイムリーに提供。

さらに情報発信の拠点として観光案内所(通称センター)も設置。観光カリスマである小川原氏が運営部会長として事業を推進。現在は後志観光連盟が運営。

平成18年5月には、開設35ヶ月で累計アクセス110万件を突破。



小樽 センターで ネットを閲覧する観光客

大型クルーズ船の寄港



H18年3月に寄港した飛鳥 (50,142トン)

近年のクルーズ船旅行への注目に合わせ、小樽市では国内外のクルーズ関係企業・団体等へ誘致活動を実施。2万トン以上のクルーズ船の寄港が年間4回(H13)から11回(H18)へ大幅に増加。

問い合わせ先

小樽市経済部観光振興室
(社)小樽観光協会
小樽観光誘致促進協議会
しりべし/ネット

Tel : 0134 - 32 - 4111
Tel : 0134 - 33 - 2510
<http://www.otaru.gr.jp/>
<http://www.shiribeshi-i.net/>

<http://www.city.otaru.hokkaido.jp/>